

西南学院小学校 学校長メッセージ

「学校通信 Wings 2019年7月号」

平和を実現する人々は、幸いである。 マタイによる福音書5章9節

早いもので1学期最後の月に入りました。福岡もようやく梅雨入りしましたが「毎日しとしと降り続く雨」そんな梅雨のイメージはすっかり変わってしまい、毎年豪雨に見舞われるようになってしまいました。今年は被害が少なく済むようにと願うばかりです。本校でも、昨年7月6日金曜日には豪雨のため集団下校や学校までのお迎えをお願いする事態となりました。再びこのような事態が起きたときのために、年度初めに集団下校のルートや学校での待機希望等について調査を行いました。先日、改めて文書にてお伝えしましたが、提出後状況が変わった場合には必ず担任に連絡をお願いします。また、緊急時のお迎えは必ず保護者の方に来ていただくことについても、よろしくをお願いします。

ところで、来年度から小学校では新しい指導要領に基づいて教育活動が行われるようになります。

文部科学省のホームページに、新しい指導要領について詳しい説明が掲載されていますが、その中の「改訂に込められた思い」には、「主体的、対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点から、『何を学ぶか』だけでなく『どのように学ぶか』も重視して授業を改善します。」と書かれています。私の個人的な感覚としては、これまでも現場で言われてきたことで、特段新しいものであるという気はしません。ただ、「言うは易し、行うは難し」であることも確かです。

そもそも「主体的、対話的で深い学び」とはどのようなことなのでしょう。日常よく使う言葉で表されていますが、定義はそう簡単ではなさそうです。「自ら進んで意欲的に取り組み、意見や考えを交流しあったり、より詳しい資料にあたったりして、知識を増やしより高度な思考力を身につけていくこと」。どうでしょう。異論はあるかもしれませんが、大きく外れてはいないと思います。

発達とは、外側からの働きかけとそれに対する内側からの反応が呼応しあうこと（響きあうこと）でなされていくものです。ですから新しい指導要領が目指す学びも「内側から反応する内的な蓄積」が多いほど、達成しやすくなると言えるのではないかと思います。もちろん、適切な働きかけつまり教師の指導力が重要であるということは言うまでもありませんが。

「内的な蓄積」とは、主に知識や経験などのことです。「あっ、それ少し知ってる」「聞いたことがある」「見たことがある」「行ったことがある」「やったことがある」こうした反応があるのとないのでは、学習に対する関心や意欲も違ってきます。そればかりではなく、具体的な経験や知識があつてこそ、それらを土台に抽象的な概念を組み立てることができ実感として理解できるというものです。夏休みは、ぜひいろいろな経験も味わわせてください。

「内的な蓄積」とは少し違うことかもしれませんが、日頃から様々なことに「なぜ、どうしてだろう」「どうなっているのだろう」という意識、つまり知的好奇心を持っておくことも特に主体的に学習に取り組むうえで大切なことだと思います。もしお子様が身近な疑問を口にしたときは、できるだけ、忙しいからとそのままにしたり、反対に直ぐに答えを教えてしまったりせず、「さあ、どうしてだろうね。あなたはどう思う？」とか「(忙しいときは後で)一緒に調べてみようか」と寄り添ってあげてください。そうした日々の小さな積み重ねが大きな成長へとつながっていきま

す。

夏休みの自由研究や作品募集への応募も、知的好奇心だけでなく、積極的に課題に取り組む意欲と最後までやり遂げる意思を育むよい機会です。低学年など自分の力だけでは難しい場合もあるかと思いますが、親子で一緒に取り組むこともとても素敵なおことだと思います。ただ熱心さのあまり「親の作品」になってしまわないように。「子どものためにあえてしてやらない。」ことも時には必要です。

1学期も残り3週間余り。どうか体調と安全に十分注意して元気に過ごすようにしてください。

(文責 宮崎 隆一)